

セイタカシギは戦う

日本でセイタカシギが繁殖するのは限られた地域だけの珍鳥です。木更津にその貴重な繁殖地があります。卵や雛を襲う天敵は蛇やカラス、大雨で巣が水没するなどの天災もあり、子育て中の親鳥は神経質になります。5月のある日、巣に近づくダイサギを威嚇して、最後には体重差が10倍もあろうと思われる相手をたった1羽で追い出した場面を目撃しました。巣を守ろうとする気迫が勝利の鍵と見受けました。カラスが単独で来た時は集団で防衛して追い出せますが、相手の数が多いと隙ができるので、犠牲者が出ます。



繁殖中の優美なペアダンス



ダイサギが飛来 巣の近くで餌取り開始



こらー 巣に近づくな！ 俺は何もしないよ



とにかく目障りだ こっちへ来るな！



えーい 跳び蹴りだー



分かったよ 他所へ行けばいいんだろ

必死に巣の防衛をしていた5月から一月後の6月某日に再訪したのは、今年の繁殖がどうなったか見届ける為です。昨年はカラスの妨害ですべての雛が犠牲になったと聞いていたので心配していました。現地に着くと直ぐに今年生まれの雛が見えたので一安心、そこへいつも見かける地元の熱心な観察者が来たので状況を聞くと、5ペアが繁殖に成功し雛が17羽育っていると笑顔で教えてくれました。このペアは雛が4羽、こちらのペアは3羽というように、それぞれの家族構成を熟知していましたから毎日通ってのかなと思います。今のところカラスの被害を受けていないのは人間が頻繁に見廻っているのも、カラスが近づかなくなったのかとも言っていました。



雛は親鳥の目の届く範囲で自由に餌探し



親鳥は見張りしつつ自分も餌取り



雛の体温維持のため抱えて温める



3羽目の入るスペースはあるかな？



保温タイム終わり



カルガモも近くで子育て中

佐倉市 坂本 文雄

ムシたちの夏 (樹液をめぐる戦い③)

夏になるとクヌギ、コナラに樹液を提供する樹液酒場が開店します。樹液酒場には樹液を求めてカブトムシ、クワガタムシ、スズメバチ、カナブン、オオムラサキ、ルリタテハなどタテハチョウの仲間などが集まりますが、樹液が出ている場所は、限られているため必ず争いがおきます。



その戦いは、いつ終わるのかな?と思うぐらい長く続くものがあります。樹液酒場を巡る戦いは、毎年繰り返される雑木林のメインイベントです。今年もどんな戦いが繰り広げられるかとても楽しみです。

<ノコギリクワガタ奮戦記>

樹液酒場でメスと出会ったノコギリクワガタのオスは、カブトムシ (メス) を追い出そうと戦いを始めました。

8時: 大あごを大きく開いてカブトムシを挟もうとしますが、挟みきれません。



8時10分: スズメバチが、飛んできました。カブトムシを後回しにして、スズメバチを追い払いました。



8時13分: オオムラサキが、飛んできましたが、気にすることなくカブトムシの左側に移動しました。大あごを斜めにしてカブトムシの胸を上下に挟むことができました。カブトムシの体が浮きました。



8時25分: 大あごでカブトムシの前足を挟み、カブトムシを持ち上げました。その後、カブトムシを落としました。



約30分の戦いでした、ノコギリクワガタが、カブトムシを持ち上げるのを見たとき、私も思わず力が入りました。

<オオスズメバチの戦い>

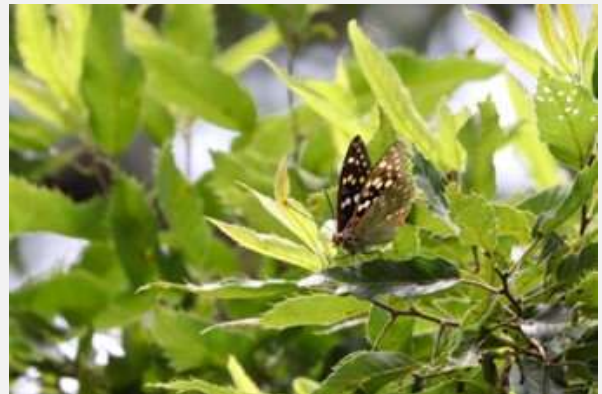
スズメバチは、敏捷性でカブトムシやクワガタムシに挑みます。

樹液酒場をカブトムシ(メス)が、独占していました。カナブンを追いつつ、戦いを始めました。

得意の敏捷性で、カブトムシを四方から攻めます。しかし、硬い体に、歯がたちません。そこで、足をしつこく噛んで揺さぶります。ノコギリクワガタだったら、逃げ出すところですが、カブトムシは、足でスズメバチを払いビクともしませんでした。スズメバチは、諦めて飛び去りました。今回は、カブトムシの粘り勝ちでした。



雑木林の近況 : 2024年6月22日



関東は、例年より2週間遅い梅雨入りとなりました。天気予報では、21日は「雨」、翌日の22日は「晴れ」とのことでした。雨の翌日は、生き物たちの活動が、活発になると予測して、マイフィールドの若葉区雑木林に行きました。「もしかしたら、オオムラサキの初見となるかも?」と期待が膨らみました。そして、クヌギの大木の下で待っていると、期待どおり、3頭のオオムラサキが現れました。羽化して日数が経っていないためか、翅は綺麗でした。

西野 孝法(千葉市)

知ってるつもりが知らなかった箱根

初めて箱根に触れたのは大学の時でした。ゼミ合宿で湖尻のバンガローに泊り、集中ゼミを行ったのでした。課題を発表しましたが、内容は全く覚えていません。ご飯を炊き、石畳を歩いたことだけは覚えています。帰りは教授の mark II に同乗し、大名旅行のようだったという記憶が残っています。

次に訪れたのは10年ほど前のことで、〇〇ツーリズムのバス旅行。箱根登山鉄道がその時期になると沿線に植えられたアジサイが見事に咲いている様子を車窓から眺めるといったものでした。

箱根といえば駅伝が有名で、今回駅伝のコースを辿ってみて、選手たちは走って登っていくのかと思うと、「ちょっとそれは酷だろう」と思い到りました。

昨年訪れたときはロープウェイに乗った時に大揺れで怖い思いをしたこと、大涌谷に外国人観光客の姿が多く、圧倒されたのを覚えています。今回の箱根は植物・昆虫中心の自然観察でした。箱根ジオパークを観覧し、箱根火山の成り立ちからカルデラの形成といった点に触れることができ、「知らなかった。本当だ」とびっくりすることばかりでした。今回訪問対象の真鶴半島、熱海温泉、柿田川湧水群いずれも箱根火山や富士山の生成過程で出来上がった観光地です。「これが箱根の箱根たるゆえんだったのか」と妙に納得し「知らなかった」ことに気がつきました。

大学生の頃、理科実験施設が真鶴半島にあり、半島の一部は極相林だと教えられ、行ってみたいと自分の宿題にしていたのですが、一度も訪れる機会がなく、そのまま卒業してしまいました。松戸に住み始め、松戸駅にほど近い浅間神社が極相林だということを聞いて、真鶴半島の極相林とは大分様子が違うなと思いながら、大学の頃のことを思い起こしてみました。真鶴半島は江戸幕府の天領で松を植林によりマツ、その下に広葉樹とゾーンを決めて植栽されてしまったのではないかと思います、それも極相林として認められていたのかもしれませんが。

最後の観察場所である箱根湿生花園は前に訪れた時は、開花が思わしくなく、「入園料を減額しています」とチケット売り場に掲示されていたので入場を取りやめてしまいました。湿生花園は低層湿原区や岩場植物区や湿生林区に分けて生育させているため、見どころ満載の飽きることの無い植物園です。加えて、仙石原湿原がそこに迫っていて木道沿いに観察できるところでした。

箱根と言えば、大涌谷と駅伝しか知らないのに、「知っているつもり」で物事を見ていた。おそらく、真鶴半島、熱海温泉、柿田川、箱根をまとめてみるというダイナミックな観点によって頭の中が整理できた、個々の事象をつなげてみることでできたという点、最後の大涌谷、ジオパークと湿生花園は収穫物が多く、頭の整理ができた、来たかいたが良かったと思いました。

(松戸市 藤田 隆)



真鶴海岸



箱根大涌谷

三ツ峠山にアツモリソウを訪ねて

1 憧れのアツモリソウ

三ツ峠山（標高 1,785m、山梨県富士河口湖町ほか）は、これまでも何度も訪れていましたが、ある時、関連の記事を読んでいて「アツモリソウ」の言葉が目にとまりました。

アツモリソウと言えば、植物に興味を持ち始めた若かりし頃、こんな形の花があるんだ!?と、クマガイソウとともに、頭の片隅に刻み込まれました。千葉県に来てからクマガイソウについては何度か見聞きしてきましたが、同種については、最近では関心さえ消えかけていました。

毎年出かける夏前（山の上は春）の山行のタイミングが、日々の趣味やら不安定なお天気のせいやらで6月に入ってしまい、そうだ、6月と言えば！と思い至って出かけることにしました。

同種は、温帯の草地や疎林に生育・分布し、環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

源平合戦に因んで、アツモリソウは花の形を平敦盛の背負った母衣（ほろ）に見立てて命名、一方、クマガイソウは熊谷直実のそれに見立てて命名された、のだとか。

写真1は、6月17日、三ツ峠山頂付近の登山道から、保護柵に囲われた同種を撮影したものです。最盛期を過ぎて、花（赤紫色）が随分色あせてしまっていますが、形はまだしっかりしています。

近くの山小屋のスタッフに尋ねたところ、多くは登山道からは見えないが、この場所以外でも生育しているとのこと。そして、ある場所（実は一度通って戻ってきてしまったところ）について、かなり親切なヒントをいただいて、疲れた体に鞭打ちながら、再びその場所に向かいました。

そうしたところ、ナント！・・・と言うことで、あとはご想像にお任せしたいと思います。



写真1

2 三ツ峠山での保護活動。

同山では、富士箱根伊豆国立公園の一角として、環境省及び山梨県が自然保護対策を講じるとともに（写真2）、市民団体が、『日本山岳遺産』の認定を受けて、アツモリソウなどの希少植物を盗掘や野生鹿の食害から守る活動を行っています。

写真3は、三ツ峠山頂付近の様子です。一番手前の格子柵は登山道沿いに設置されたもの。その先に保護ネット、そして更にその先、赤矢印のところに、写真1のアツモリソウの小群落を囲っている保護柵が設置されています。保護対策の厳重さがうかがえます。

日本山岳遺産事業（基金）とは、株式会社山と溪谷社などが中心となって、日本の山々がもつ豊かな自然・文化を次世代に継承していく（活動の）ために設立された基金です。2024年1月現在48カ所を認定し、登山道整備、携帯トイレの普及・啓発、希少植物の盗掘防止、自然環境教育などの取り組みを行う団体を支援している、ということです。

千葉県内では、2019年の台風の甚大な被害をきっかけに始まった、市民団体による鋸山での保全活動が、2020年に認定を受けています。



写真2



写真3

3 出会い色々 (順不同)

3-1 サンショウバラ ~嬉しい出会い~

登りで出会った個体は地面に花びらが散っていて、何だろう?と思っただけでしたが、下山途中に出会った別個体、見上げた先に大きなピンク色の花が!!そして葉の様子から、初対面ながら直感的にサンショウバラ!?と思いました。とてもきれいな色で大きくて、たいへん嬉しい出会いでした。樹高は5~6mほど。葉がサンショウに似ていることによる命名です。

山地に生育し、山梨、静岡、神奈川の富士山周辺限定の分布のようです。海岸に生育するハマナスや、高山に生育するタカネバラなどが近い仲間です。



サンショウバラ

3-2 オオバアサガラ ~はるかなる青春の思い出~

はるか昔、学生時代に覚えて以来、一度もお目にかかれず、でも何故か名前だけは頭の片隅にこびりついていたこのお方。昨年と同じ頃、大菩薩峠近くの沢筋での出会いでした。淡い初恋のお相手に再会したような懐かしさ・・・この度は、随分背が高くてすっかりとうが立ってしまったような・・・。ニセアカシアにしては葉が違うなあ、と思いつつカメラに収めました。

数少ないエゴノキの仲間です。あるサイトによれば、シカの不嗜好植物とのことです。



オオバアサガラ

3-3 クサタチバナ ~副花冠なるもの~

この季節の富士五湖周辺で、何度か見かけています。改めて調べてみますと、福島県以西の本州と、四国、九州に分布、環境省では準絶滅危惧 (NT)、千葉県では、消息不明・絶滅生物 (X) となっています。

キョウチクトウ科 (旧分類ではガガイモ科) カモメツル属で、この端正な姿が、コバノカモメツルなどに近い仲間と言うのが驚きです。花をよく見ると中央に副花冠なるものがあり、コバノカモメツルと共通しています。和名は「草橘」、花がタチバナに似ていることから。

こちらもシカの不嗜好植物のようです。



クサタチバナ

3-4 アヤメ ~掃き溜めに鶴、ガレ場にアヤメ~

アヤメと言えば、ノハナショウブやカキツバタと違って、湿地ではなく乾いた草地に生育する、とされています。三つ峠山頂付近の草地でも開花していました。

ところが・・・、登山コース途中、何かの理由で森が開かれて、カラマツの苗木が植えられ、周囲がネットで囲われていました。そしてその中に紫色の花、カメラを望遠にしてみたら、ナンとアヤメでした。右の写真でもお分かりのとおり、周囲は草地と言うよりガレ場に近い斜面で、付近にはキバナノヤマオダマキも見られました。こんな環境にも育つんですねえ、驚きました。



アヤメ

(記：茂原市 望月力智)